

■研究・実践の課題（テーマ）

食事調査法の検討 — 食事写真記録法の妥当性 —

■主任研究者 下方浩史

■共同研究者 徳留裕子、早瀬須美子、庄司吏香、三ツロ千代菊

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

[目的] 中高年を対象に開発された食物摂取頻度調査票（FFQ）を、大学生用に改訂した FFQ の妥当性・再現性について検討する。

[方法] FFQ の妥当性は、2014 年管理栄養学部女子学生 102 名を対象にした秤量食事記録調査（3 日間）をゴールドスタンダードとして比較し、再現性は 96 名を対象に、2019 年 12 月、2020 年 4 月に FFQ 調査を実施して検討した。エネルギー、エネルギー産生栄養素、7 ミネラル、9 ビタミン、食物繊維、食塩摂取量、計 22 栄養素について、相関係数（ r ）を用いて妥当性・再現性について検討した。

[結果] 妥当性については、エネルギーおよびエネルギー産生栄養素の r の中央値は粗値 0.56、log 値 0.54、ミネラルのそれは、0.47, 0.53, ビタミンのそれは 0.37, 0.39 であった。なお、ナトリウム・食塩と一部のビタミン類の妥当性に関する r は低かった。再現性の r はエネルギーおよびエネルギー産生栄養素は粗値 0.61、log 値 0.68, ミネラルのそれは 0.66, 0.71, ビタミンのそれは 0.55, 0.61 であった。なお、ビタミン A、ビタミン C の r は有意ではあったが、相関係数は低かった。 $r \geq 0.4$ 以上を得られた項目は、妥当性検討では粗値で 22 栄養素中 13, log 値で 14 であり、再現性では粗値 20、log 値 22 栄養素と多かった。

[結論] 改訂版 FFQ は、限界はあるものの若年層の栄養素摂取量の推定においてある程度の妥当性・再現性を有することを示した。